

## 埼玉県東南部, 安行と越谷の地域変容を読む

—田山花袋著『東京近郊一日の行楽』を手がかりに—

秋本 弘章

### 1. はじめに

近年, 散歩といわれる余暇行動が注目されている。テレビでも散歩をテーマとした番組が放映されているし, 書店の地図・観光ガイドコーナーにも多くの出版物が見られる。身近な地域あるいは周辺の町などの散歩は, 多額の支出をすることなく楽しむことができるので, 不況といわれる時代を背景としたものなのかもしれない。とはいえ, こうした番組や出版物の多くは, 食べ歩き情報や名所や公園等の施設の紹介が主となっており, 身の回りを風景に着目して, 自然的基盤や歴史的背景, あるいは地理空間そのものを読み解こうとする視点に欠けるきらいがある。

身近な地域を探訪するという行動は, 古くから行われている観光の一形態である。わが国でも, 江戸時代には, 名所図会などが出版されており, それを手がかりに多くの町人が出かけていたことが推察される。

江戸時代の身近な地域の観光は主として町人が主体となって行われていた。多くの場合, 寺社およびそこでの行事が観光対象となった。花鳥風月などの風景をめぐる名所も成立したが, 風景を成り立たせている自然や人文に対して関心があったとはとらえにくい。

明治から大正期にかけて, 新たな観光のあり方が提示される。国木田独歩の著した『武蔵野』は人々に新しい風景の見方, すなわち空間そのものをとらえることを提示し, 今までの名所・旧跡めぐりとは異なるタイプの観光行動を誘発したという(樋口2000)。

本稿では, 国木田独歩とほぼ同時期の作家である田山花袋の書いた『東京近郊一日の行楽』の中に記述されている東京の郊外, 埼玉県南東部の安行と越谷を取り上げ, 田山花袋の見た景観が現在どのように変容しているかを記述する。これによって身近な地域の観光の一視点を提示するとともに, 今後の地域づくりの方向

性を示すことを目的とする。

### 2. 田山花袋の仕事と時代的背景

田山花袋は1871(明治4)年, 栃木県館林の旧藩士の家に生まれた。年少期に館林で漢学を学んだ後, 14歳のとき一家で上京した。青年期には, 文学青年として尾崎紅葉, 島崎藤村, 国木田独歩などと交友を結んだ。1899(明治32)年, 博文社に入社, 編集者としてさまざまな仕事をした。そのなかで, 特に重要なのは『大日本地誌』の編集である。『東京の三十年』に, 次のように記述している。

「『大日本地誌』の編輯の手伝いを明治36年から始めた。山崎直方君, 佐藤伝次郎君が主任で, 私とほかに若い文学士1名, 理学士1名が手伝った。私は山崎君, 佐藤君から地理学に対する科学的研究方法を教えられたことを感謝せずにはいられない。」

田山花袋の出版した書物は200冊を超えといわれるがうち, 4分の1が紀行文やそのほかの旅行関連書であったという(小林1991)。地誌書の編纂がこうした作品を生み出すバックボーンになっていたと考えられる。

田山花袋の活躍した明治末から大正期は, 日清戦争, 日露戦争を経て国力が充実してくる時期でもあった。この時期は同時に, 国家認識を確立させる時期でもあった。学校教育においても国定教科書の編纂が行われ, 東京を中心とする国家像の定着がはかられた。この基盤として, 陸軍省参謀本部陸地測量部では全国の地形図の作成が進められていたし, 田山が編纂者として加わった山崎直方教授らによる『大日本地誌』もある意味では国家的な事業として行われていたと考えられる。さらに, 交通網の発達・情報通信網の発達が国家の一体性を保証した。

国家の基盤となる郷土についての関心も高まっていく。新渡戸稲造は、「地方学」を提唱し、自らが後援者となって、柳田国男、小田内通敏らによる「郷土会」を発足させた。柳田国男は1913年に雑誌『郷土研究』を創刊し、小田内通敏は1918年に『帝都と近郊』を著すなど郷土に即した研究が進むようになる。

国土の再発見・郷土の再発見は、一般の人々の間では観光という行動として表現されていく。田山花袋はこの時期、『東京の近郊』『京阪一日の行楽』『東京近郊一日の行楽』『満鮮の行楽』『日本一周』などのガイドブックないし紀行文を相次いで発表している。

この時代の自然主義文学者は、自然や地理的事象に関して正確な描写に努めている。国木田独歩の『武蔵野』の地形の記述は、その特徴を正確にとらえているという(杉浦1992)。しかしながら、国木田独歩の『武蔵野』には、ほとんど地名が出てこない。地名は友人からの手紙を引用した部分がほとんどで、彼自身の文章の中で明確に地名が出てくるのは小金井くらいであるという。このことに積極的な意味を見出しているのは樋口(2000)である。樋口は、国木田が東京郊外の「武蔵野」をあてもなく歩くなかで新たな視点を獲得しているというのである。江戸時代の名所めぐりは、寺社や史跡、景物を対象としており、それらは場所が特定されている。しかし、国木田独歩は地名を記述しないことで特定の地物に視点が固定されることから免れている。そこで、樋口は、国木田の関心が特定の場所ではなく、「武蔵野」という空間的な広がりそのものにあったと分析しているのである。「武蔵野」を記述する中で国木田は、郊外という空間を見出したのである。

これに対して、田山花袋は場所に強いこだわりを持っている。彼の代表作のひとつである『田舎教師』(1909年発表)は、きわめて正確な地理的な描写を基に話を展開している。初版本には、3色刷の北関東地図を添付しているほどである。田山花袋は、読者に主人公の時間と空間の移動について地図を参照しつつ読むことを要請している。すなわち、主人公の空間の移動が、内面(心)の動きと密接にかかわっていることを示唆しているのである。主人公が、村の小学校を卒業し、町の中学校へ進学すなわち空間移動をするということは、将来

への希望を象徴する。一方、町の中学校を卒業した後、級友の多くが都会の学校に進学していくのに対して、彼は貧しさゆえ、村の代用教員として赴任することを余儀なくされる。家庭の貧しさといった現実との葛藤、失意を町から村への空間移動ということを示している。単に地物の描写だけではなく、都市階層なども含めて、『田舎教師』の地理的描写の正確性は、杉浦(1992)によっても検証されている。

### 3. 『東京近郊一日の行楽』の地理空間と安行および越谷の位置

彼の著作の4分の1を占める紀行文に関して、彼自身、新しき紀行文(1912)の中で次のように述べている。「新しい紀行文は地図の精確と絵画の妙味とをもつたものでなくてはならない。」

場所の正確な描写を紀行文の重要な要素と考えていたのである。本稿で検討する『東京近郊一日の行楽』も、正確な記述を期している。しかも、その凡例では「地理的連絡も表面には現れていないけれども、細かに読めばおのずからそれがわかるように書いたつもりである。陸軍の五万分の一の地図を傍らにおいて見れば、いっそうはっきりと地理は呑み込めて来るであろうと思う」「五万分の一の地図は何ういふ場合にも離さないようにする方が好い」と述べている。また、『京阪一日の行楽』の凡例では「地理はその書いたときのみが精確だといわれている」と記述し、地理的事象が変容することにも触れている。すなわち、田山花袋の地理的事象についての確かな知識と正確な観察が紀行文やガイドブックの基盤となっているのである。

さて、『東京近郊一日の行楽』の空間範囲に広がりについて考えてみよう。『東京近郊一日の行楽』に先立って、田山花袋は『東京の近郊』を著している。これによれば、東京の郊外の範囲は、次のようなものであった。

東郊: 隅田川から東

西郊: 板橋から渋谷目黒を起点として西

北郊: 千住・板橋, 荒川

南郊: 大森・川崎, 京浜電車の通っているところ

田山花袋の言うところの東京の接続地である。この範囲は江戸時代の郊外行楽圏とほぼ一致している(品

田1974)。すなわち、徒歩で日帰り遊覧が可能な地帯であり、都心からほぼ24km(6里)に当たる。奥州街道の草加・越谷、日光御成街道沿いの鳩ヶ谷、中仙道の浦和・大宮、川越街道の白子・膝折、甲州街道の小金井・調布・府中、大山街道・東海道の二子、川崎など多摩川周辺、東は国府台あたりまでである。その一方で、東京の近郊を「広い意味では武蔵野の全てを含む」とも言っている。

では田山花袋の考える郊外とはどのような空間なのであろうか。

郊外が都市との関係性のもとで成り立っている空間である以上、都市空間の変容は郊外空間の変容を促すことになる。それは、東京の東郊、隅田川の記述に象徴される。

「隅田川の沿岸は、今は近郊気分を多く失ってしまった。近郊から東京市市に入ってしまった。向島の土手なども、まったく都会の気分である。」

これに対して、埼玉県原市町について、次のように記述する。

「秋の晴れた日などに、子供や細君をつれて、蓮田か

ら原市町へ行って、そこから上尾に出て帰ってくるのも面白い郊外散歩の一つであろうと私は思う。勿論、この郊外散策者は、普通の名勝探訪や、寺参りや、名物遊覧や、そういうものから、一歩進んだ郊外散策者でなければ駄目だが…。(中略)十年前には、渋谷の奥、角筈の奥、目黒の奥に、まだこういう場所が残っていたのだが、今はすっかりさういう面影はなくなってしまった。武蔵野のさまを知ろうと思う人は、だから、是非一度はここに来て見る必要がある。」

これは、郊外という空間が都市の発展に伴い、外延的に拡大していくということ、地理学で言う空間遷移という概念を記述したものであると考えられる。地名を明示することで、単に空間の中での位置を表示するだけでなく、空間の中での位置がどういう意味を持つかが都市との関係性において検討されているのである。まさに、地理空間が興味の対象となっていると考えられる。

『東京近郊一日の行楽』では、日帰り行楽圏ばかりでなく、1、2泊の旅行という範囲を示しているため、対象とする空間範囲はかなり広がっている。栃木県の日

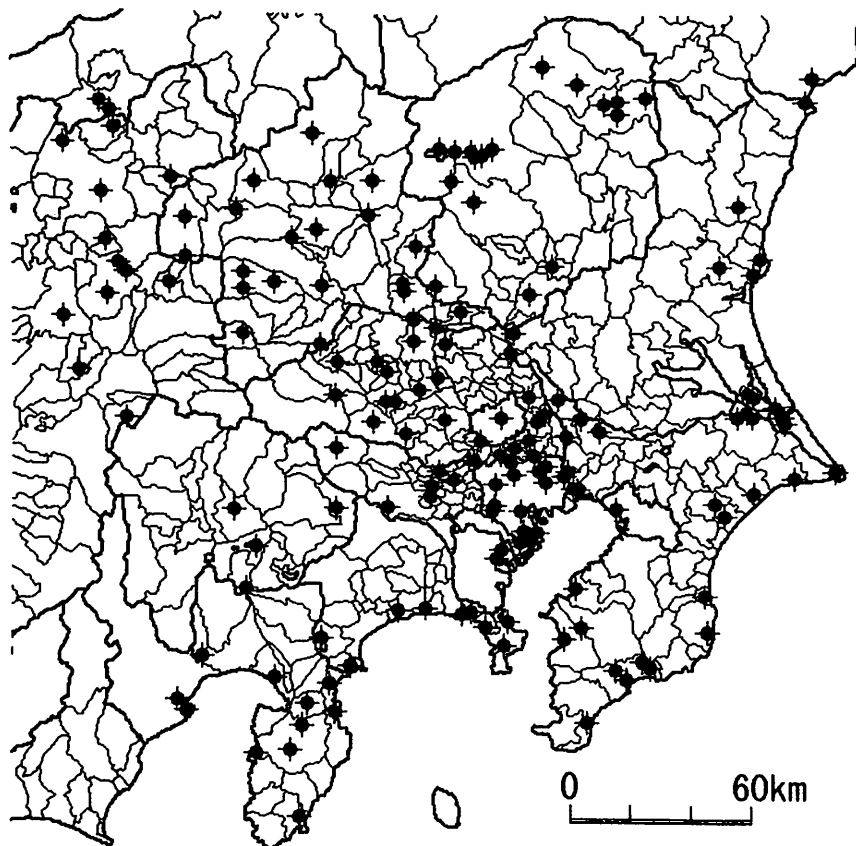


図1 「東京近郊一日の行楽」に記載された場所

光、信越国境の妙高高原、静岡県三保の松原など関東甲信越一帯を対象としている(図1)。

「汽車が出来たり、電車が出来たりするために、今まで交通の便のなかったところも分けなくいけるようになる場合がよくある。」と述べる。鉄道を利用することで、行動範囲が飛躍的に拡大し、それとともにいわゆる郊外という空間の範囲および内包する事象も変容することが暗黙のうちに提示されているとみることができる。

ここでとりあげる安行は東京都心部の北約17km、越谷は同じく約25kmに位置する。江戸時代の日帰り行楽圏では限界に近いところであった。大正期にここを訪れた田山花袋は、かつて、より東京に近いところで見られた近郊の特色を見出すことになったのである。

#### 4. 安行の探訪

##### 1) 大正期の安行 - 田山花袋の見た安行

安行は江戸時代において近郊観光地としてある程度の認識はあったと思われる。たとえば、『遊歴雑記』の著者津田大浄も、安行の西立野にある百観音を訪れ、野点や連句を楽しんだという(川口市1988a)。しかしながら、田山花袋の観光の目的は、寺社めぐりとはまったく異なっている。

「別に、さう大した眺めのあるところではない。(中略)平凡な埼玉の野である。しかし、そこにあって一日植木や苗木を見て歩くのは、氣ばらしになって好い。珍しい木や苗木なども澤山ある。」

すなわち、名所旧跡や単なる風景にはほとんど興味を示していない。彼の関心は、植木苗木などの産業に向いているのである。

「東武鐵道を旅する人は、蒲生駅からをりをり荷づく

ろいされた大きな植木の運送されるのを目にするであらう。また、その名物を記した札に、安行、植木苗木とあるのを見るであらう。」

駅から発送される荷物や案内板に着目して、訪れる場所の特徴を見出している。こうした視点は、江戸時代からの名所・旧跡観光にはない、地理学的視点といえることができる。

田山花袋の見た安行の特質を検討しよう。

「安行はそこから西へ一里、一村はすべて植木苗木を業としている」とある。一村全て植木・苗木を業としているというのは少々大げさであるが、この時期すでに安行は日本における植木苗木の有数の産地となっていたことは確かである。たとえば、『埼玉県写真帖(大正10年)』によれば、「安行は本邦に於ける、四大苗木産地の一にして、その生産額百万円に達す、生産地は北足立郡安行村の外、神根、戸塚並びにその付近の町村にして、いずれも安行苗木の名を以て内地は勿論、遠く海外に輸出せらる」。また、1907(明治40)年頃の農産物生産高においても、苗木の生産額は、安行村だけで百万円、周辺町村を含めると二百万円にも達している(表1)。1916(大正5)年発行の5万分の1地形図粕壁および大宮、1919(大正8)年の5万分の1の地形図東京西北部、東京東北部をみると、安行村東部の沖積低地の部分には水田が広がっているが、台地上には広葉樹林が卓越している。他の台地上に広く見られる畑や桑園が少ないことを読み取ることができる(図2)。

ところで、安行の「植木・苗木・花き」の始まりは江戸時代中期にさかのぼる。安行の植木栽培の開祖といわれているのが1635(寛永12)年生まれ吉田権之丞である。彼の経歴等については確かな史料がなく詳細は定かではない。しかし、伝えられるところによる

表1 1907(明治40)年ごろの安行周辺の農産物生産高

	米	大麦	小麦	雑穀及び 菽類	蔬菜	甘藷	苗木	繭
	石	石	石	石	円	貫目	円	円
新郷村	4,392	1,978	157	1,468	105,705	295,200	13,940	2,650
安行村	3,674	2,175	150	493	59,210	89,500	109,400	526
神根村	2,982	1,848	341	237	25,085	51,700	83,500	1,505
戸塚村	2,587	1,672	84	139	26,400	32,000	57,500	—

出典:川口市史 近代資料編



図2 安行周辺の地形図  
 (大日本帝国陸地測量部 5万分の1地形図 大正5年発行 大宮、粕壁 大正8年発行 東京東北部、東京西北部)

と庭木や花き栽培にも関心が高い農民であったとい  
 う。1657(明暦3)年の江戸の大火に際して、都市復興  
 用の樹木・資材等を販売し成功を取め、元禄年代(1688  
 ~1703)になるとサツキ、ツツジといった庭木類を販売  
 するようになった。しかし、江戸時代は、田畑において  
 植木類を栽培することは許されていなかったこと、江  
 戸に近い巢鴨・駒込・染井(染井吉野の発祥の地とされ  
 る)に主要産地があったため、それほどの発展は見せず、  
 江戸の主要生産地の後方供給地的性格であったと考え  
 られている(川口市1988b)。

明治初期の地誌を記録した『武蔵国郡村誌』に、安行  
 周辺の村の民業に次のような記述がある。「男女多く  
 は耕耨を専にし、傍ら植木工を業とするもの少しく  
 あり」(安行村)。「男女農を専とし傍工業及植木を営む  
 ものあり」(赤山領領家村)。植木・苗木に関して記述

があるのはこの2村のみである。すなわち明治初期に  
 は安行に植木苗木業が存在はしたもののあくまで副業  
 的な経営に過ぎなかったのである。

植木・苗木が産業として成熟していくのは、日清日露  
 両戦期の1900年ごろ(明治30年代)からであるといわ  
 れている(川口市1988)。この時期には、梨苗ついでリ  
 ンゴ苗など果樹苗木が主要商品となった。また、促成  
 栽培の技術が確立され、「赤山の枝物」の地位を確立し  
 たという。川口市史(1988b)では安行の発展の要因と  
 して、当時全国的な広がりがあった桑苗の生産ではな  
 く、かなり特殊な部門を選択したことで、他の植木苗  
 木生産地域と競合することがなかったと指摘している。  
 しかし、より重要な要因として、この時期には、江戸時  
 代に苗木・植木の主要産地であった大久保、巢鴨・駒込・  
 染井といった地区において宅地化が進展し、植木産地

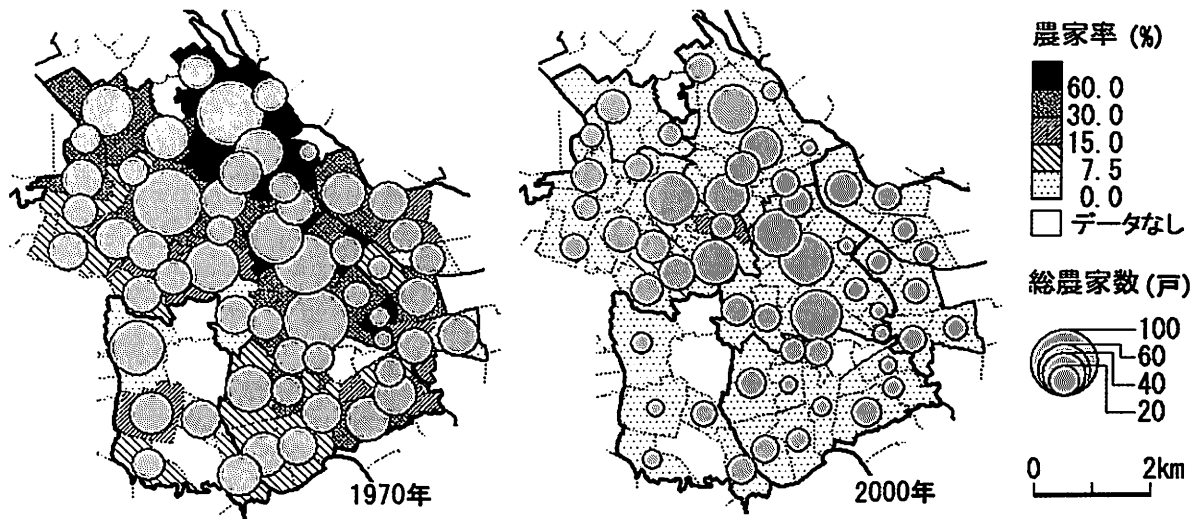


図3 旧安行村周辺の総農家数と農家率(左1970年 右2000年)  
2000年世界農林業センサス農業集落カードより作成

としての土地基盤を失ったことも大きな要因と考えられる。田山花袋はこのことを次のように記述している。

「東京も今は植木は少なくなった。大久保・柏木あたりにいっても、もう昔のやうに好い植木がない。植木屋の親方なども、『今ちやもう安行あたりまで行かなければ、好い木はありませんや』などと言っている。」

いずれにしても、田山花袋が訪れた大正期に安行の植木苗木生産が確立したと考えられる。

## 2) 安行の土地基盤と近年の変容

植木・苗木の産地として知られるようになった安行の土地基盤を検討してみよう。安行は、大宮台地の南東部に細長く半島状に突き出た鳩ヶ谷支台を中心とし、周囲の沖積低地の一部を含む。台地の標高は15m～20m、台地面は平坦であるが、形成年代が古いいため開析が進み、台地の奥深くまで樹枝状の侵食谷が形成されている。沖積低地との比高は10mほどで、その境は急崖となっており、きわめて起伏の大きい地形になっている。

大宮台地は、第四紀更新世(約1万年前～200万年前)後期に形成された地質で構成されている。表層は黒ボク土であるが、その下には関東ローム層が約5mの厚さで広がっている。有機質が乏しいが、排水は良好で木本性の植物栽培には条件がよいといわれている。また、台地上では地下水位が低い「室」を作ることが

できる。そこでは暖地性の植物の越冬、接木などの貯蔵などが行われた。

台地南部および東部の沖積低地は、砂、シルトなどの軟弱な沖積層が厚く堆積している。台地を刻む谷地は、表面は黒泥土であるが、その下には植物繊維を含む泥炭層がある。低湿で有機質に富むため、挿し木などに適した条件となっている。

すなわち、安行は、比較的狭い範囲に乾燥地、湿地、傾斜地、日照、日陰など多様な自然条件を持つという特性がある。

明治時代後半以降発達した安行の植木・苗木・花き・花木の栽培は、第2次世界大戦中は壊滅的状况になったが、戦後は比較的早く復興した。戦災に見舞われた東京の都市の再建に花木類の需要が高まるとともに、台地上の畑の土地利用規制が緩和されたことが要因となった。1953(昭和28)年には埼玉県植物見本園(現：花と緑の振興センター)が開園、1960(昭和35)年には安行地区一帯を埼玉県立安行武南自然公園に指定するなど、行政側も緑化産業の育成を支援してきた。1960年頃から始まる経済の高度成長期には、大量の緑化樹木、家庭用樹木の需要が発生し、緑化ブームといわれる状況が到来し、安行は名実ともに植木の里となったのである。

一般に、大都市近郊における都市化の影響は、宅地化という形でも顕在化する。1974(昭和49)年の『細密数

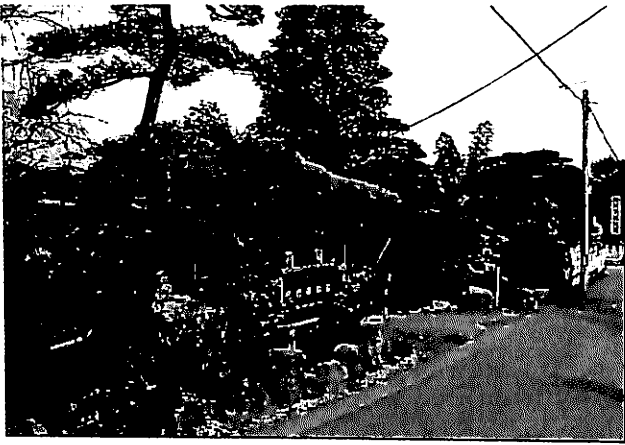


写真1 安行の造園業(2006年撮影)



写真2 安行の植木畑と宅地化の進展(2006年撮影)

値情報(10mメッシュ土地利用)』とその前後に発行された2万5千分の1地形図で安行の土地利用を概観すれば、台地上には植木生産を中心とする樹園地が広く展開する一方、東部の低地では宅地化の進展が著しい。草加市に編入された旧安行村東部の花栗・北谷地区の一部には、1964(昭和39)年に当時東洋一といわれた草加松原団地が建設されるなど、農業集落から住宅地区へと急速な変貌を遂げた。一方、川口市に属する旧安行村の大部分は東京から放射状に延びる鉄道交通の狭間にあったこともあって、景観的にも農業が卓越する状況が続いていた。しかし、1973(昭和48)年にJR武蔵野線が開通すると、徐々に宅地化が進展していくことになる。1970年世界農林業センサスによれば、川口市域の旧安行村の農家数は381戸であり、多くの農業集落において農家率は60%を超えていた(図3)。また、専業農家と第1種兼業農家が3分の2以上を占めていた。農業経営から検討すれば、耕地利用では水田が約35%であるのに対して、植木・苗木、花き・花木が約50%を占めており、7割以上の農家において植木・苗木、花き・花木が収入の1位部門を占めていたと推察される<sup>(注)</sup>。

現代でも、安行は植木・苗木、花き・花木産業が卓越している様子も観察することができる。2000年世界農林業センサスによれば、川口市域の旧安行村には269戸の農家が存在する。これは、1970年の4分の3以上の農家が農家として存続したということになる。同じ安行村でも草加市に属する東部地区の農家数が半減しているのと対照的である(図3)。農産物を販売した

農家は155戸、うち119戸が花き・花木の単一経営農家である。今日でも、この地域の農業は花き・花木の栽培が中心となっているのである。また、農業以外の造園業や流通部門を中心に営む農家も少なくない(写真1)。これらの農家も一定の樹園地を保有しており、植木・苗木畑に代表される景観を保持してきた。とはいえ、農家率は10%未満の集落が大部分を占めるなど農業の衰退傾向は明らかである。2002(平成14)年には埼玉高速鉄道が開通、安行周辺にも戸塚安行駅、新井宿駅が開設され、急速な土地利用の転換が観察できる(写真2)。また、交通の整備に伴い、都市計画上多くの場所が市街化区域に編入され、地目区別面積でも宅地が農用地を上回るようになった。今後、この地域の景観が急速に変容する可能性がある。

## 5. 越谷の探訪

### 1) 梅と桃、そして藤

「越谷は、例の中川がその町の中央を横切っているの、感じが好い。衰えた川、そこに浮んだ白い藻の花、田船、葡萄棚のある橋の畔のうどんやといふ茶屋—汽車の中から見ても、降りて歩いてみたくなるような町だ。それに、奥州街道の一駅としての気分がまだ何処かに渦巻いていて、昔の旅客の都を離れて、遠い旅に上って行ったさまなどが思いやられる。江戸を出て、旅客は大抵ここで最初の一夜を送った。」

地形的特色と江戸東京との関係を的確に示した文章で越谷の紹介が始まる。先に述べたように、田山花袋は、紀行文に関して地図の精確さとともに絵画の妙味



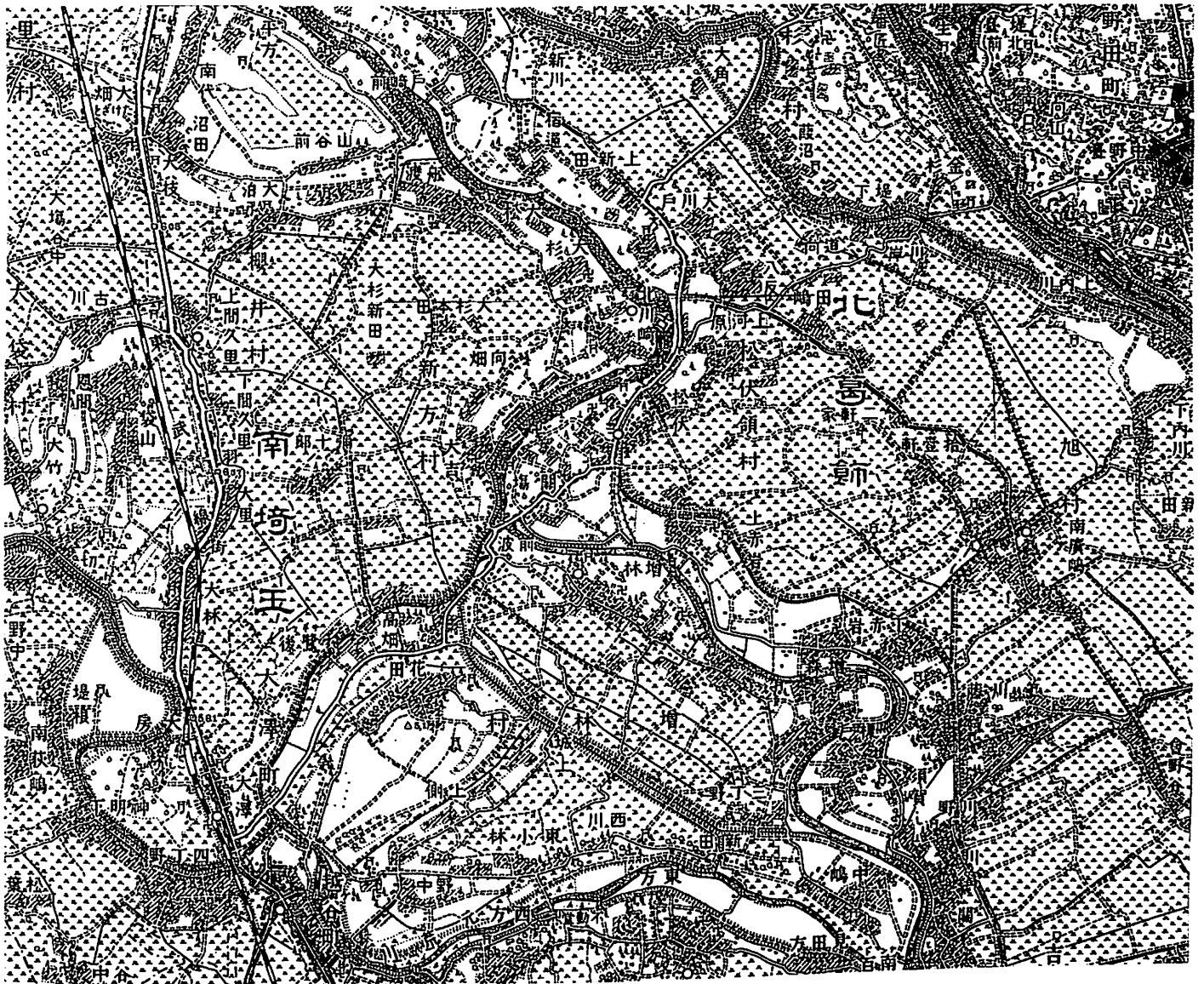


図4 越谷および松伏の水郷付近の地形図  
(大日本帝国陸地測量部 5万分の1地形図 大正5年発行 柏壁)

を重視している。越谷の記述はまさに絵画の妙味を表現したといえる。

表題にある梅と桃についてはどうであろうか。江戸時代にはすでに桜をはじめ、梅や桃などの花木をめぐる習慣があり、多くの花の名所があった。越谷も江戸時代には花の名所として知られていた。たとえば、安藤広重は版画三十六花撰に「東都越谷桃」を、二代目広重は「武蔵越かや在」で二本の桃の木を近景として富士山を望む風景画を残している。こうした事実を背景に田山花袋は、桃について次のように描いている。

「越ヶ谷では、梅より桃の方が好い。それは停車場から五町、小山があつたり、麦畑があつたりして、その中に咲いている桃の花は、一種ラスチックな感じを起こ

させる。場所もさう狭くない。田圃道をぶらぶら歩くには最もよいところである。」

これは大房から大林、袋山にかけての地域である。1916(大正5)年発行の地形図から、この地域には本荒川が蛇行して流れた跡が明確に判読できる(図4)。つまり、旧河道や自然堤防、後背湿地など、沖積平野でありながら土地の起伏がみられるところである。街道に沿った大林集落のすぐ西側に果樹園があるが、自然堤防上である。旧河道は水田として利用され、蛇行した河川跡の両側の微高地は畑や樹園地となっているから、正確な描写である。

梅についての田山花袋の記述は厳しい。

「停車場の西北の方にある。畠の中の梅の林だから、



別にこれといって興味を惹くほどのところでもない。花の時分には、かけ茶屋などが至る處に出てゐる。」と単に事実のみを記載している。梅林は1900年前後(明治30年代)になってから整備されたもので、整備後一定の年月が経過したとはいえ、人工的な雰囲気があったのかもしれない。越谷市史(1977)によれば、当時発行された『越ヶ谷案内』には次のように記されているという。「老梅数百株、鶯の宿とするには余りに広く、しかも余りに幽趣に乏しい。」

とはいえ、越谷の梅も当時はよく知られた名所であった。

これに対して、越谷の藤はそれほど知られていなかったようである。藤は粕壁が有名であったからであろう。しかしながら田山花袋は次のように記述する。

「町の東、中川の下流に久伊豆神社がある。(中略)老樹が多く、それに藤の花がかかってさいてゐるさまは、人目を惹くに足りる。房も粕壁のより長いと言われている」

このように、自ら踏査し、実際の見聞に基づいて記述し、隠れた名所を発見することにも努めている。

松伏の水郷についても同様である。本荒川にそった越谷の水郷景観については、すでに江戸時代から有名であった。田山花袋が紹介しているのは、その北側、古利根川にかけての水郷地帯である。越谷と野田を結ぶ主要道路に途中にあるとはいえ、奥州街道からいくらか離れたところにあるためあまり知られていない。田山花袋は次のように記述している。

『何處だえ？松伏の水郷ッて？』

『ちょっとわからないだらう？…。都會の人には？』

『利根川の方かね？』

『まア、それに近いね。この間、誰かのスケッチを見たら、松伏の水郷を書いてゐたよ。繪を書く人なんかは知ってるんだね？』

『そうかえ？何處たらうな？手賀沼のほうかね？』

『いや、そんな方ぢやないよ。…もつと近くだよ。越ヶ谷、知ってるね。？あそこから野田にいくあいだにあるんだよ』

『野田ッて、？小利根の？』

『さう…』

『ほ…あんなところに、そんな水郷あるのかね？』

『僕も始めて通つた時には不思議な氣がしたよ。こんなところに、こんな水郷があるかとおもつたよ。』

続けて水郷の立地条件について地理学の視点で分析している。

『何しろ、あそこは中川や古利根の横流してるところだからね。それに、葛西用水も流れているからね。非常に好いよ。繪を書く人達の知つてゐるのも無理はないよ。』

古利根堰は古利根川につくられた堰である。ここから元荒川と結ぶ逆川が流れている。逆川自体は一種の溜池で、元荒川と古利根川の水量を調整する機能を持っていた。「横流し」とは、古利根筋の用水を元荒川筋に流すという機能に着目したものと考えられる。葛西用水は、利根川の用水を埼玉県東部・東京都東部のかつての利根川流域に供給する役割を担っているが、古利根堰までは古利根川の流路を用い、古利根堰からは逆川を経て、元荒川の瓦曾根堰に達し、そこから下流は独自の流路が開削されている。まさに「横流し」なのである。

『さうかえ？しかし、ちよつと思ひつけないやうなところだね？越ヶ谷から餘程いくのかね？』

『なアに、すぐさ…。あの町を出ると、五六町で橋のあるところに出るよ。いくつもいくつも橋がつゞいてかゝつていてね。それに新緑が光つて、蘆荻の芽などがうつくしいよ。四つてをやつてゐるものもあれば、糸をたれてゐるものもあるという風でね。』

『ふむ、』

『そして、路は絶えずその川やら橋やらに添うて行くやうになつてゐるんだがね。蘆荻や眞菰がしげつてゐたり、葦切が鳴いてゐたりして、今にも氣持ちが好い。それに、一里程で中川の落ちて来てゐるところがある。ほ！、そんなところがあるのかえ？僕は何遍も思つたよ。かういうところに、都の人達は何故目をつけないのだらう？かういうところに、よい料理屋でもあつたら、さぞ好いだらう、かう思つたよ。』

『その間がどのくらゐつゞいてゐるんだね？』

『越ヶ谷から、野田の河岸まで、三里あるが、その半分は水郷だよ。中川から向うに行くと景色は段々平凡にな

つて、次第に国府台あたりの気分似たやうになつて行つて了ふよ。』

「ぢや、手前の方だね？」

「さうだ…」

「一度行つて見たいね」

「わけはないから行つて見たまへ。東武の越ヶ谷驛から野田にいさへすれば、ひとりでそこは通つて行くやうになつてあるんだから…。何でも、螢の時分一番見事だつていうことだ。大宮の螢どころの日ではないさうだ—」

「ふむ！」

「で。そこを見て、小利根をわたつて、野田の河岸から座生沼に行く。そこも、ちよつとは感じのよいところだが、夏になると、田の用水につかはれるので、沼が半分なくなつて了ふやうな形になるよ。一體、野田といふ町は、ちよつと感じのよいところだね。上方で言つて見れば、灘、西の宮とつたやうな氣のするところだよ。何と言つても、關東の醤油の本場だからね…。で、そこを見て、歸りは軌道で、常磐線の柏の方へ出て来るんだね。』

1916(大正5)年発行の5万分の1の地形図でルートを確認してみよう(図4)。越谷駅は現在の北越谷駅にあった。そこから4、5町すなわち500mほどで橋のあるところに出る。逆川に架かる橋である。橋を渡り、元荒川の旧河道によって形成された自然堤防上を道が通っていく。道の南側は、かつての元荒川の河道であり、当時は水田として利用されていた。さらに進むと

堰場で古利根川の橋に出る。古利根川は、堰によって仕切られているため、流路は広く、大量の水をたたえたと思われる。その後、松伏町へと道は入っていく。このあたりまでが田山花袋の薦める水郷である。松伏の水郷と表題にはあるが、実際は現在の越谷市域が中心ということになる。

花袋のいう水郷は単なる湖沼地帯とは明らかに異なる。勿論、水が多いということは大切であるが、そこに人の営みがあって始めて成り立つものと考えられる。その景観は水、水田、畑さらには人によって植えられたさまざまな花木類などが渾然一体となって形成されているのである。必ずしも広大な空間領域を示しているわけではない。松伏町から江戸川の渡しまでの景観を、田山花袋は平凡と表現しているが、ここは一面に水田が広がっているのである。

## 2)現代の越谷・松伏

田山花袋の見出した桃などが咲き誇る景観、水郷としての美しさを今日の越谷・松伏で見出すことは難しい。それには2つの要因がある。

第1に、農業基盤の整備事業の進展である。埼玉県東部地域の水田は、かつて生産性の低い湿田が多くを占めていた。しかし、農業生産の向上のため、土地基盤の整備が進められた結果、乾田化が進み、水をたたえた水郷という景観は失われていったのである。

越谷および松伏では河川改修や耕地整理などの農業基盤の整備事業は明治期から断続的に行われてい

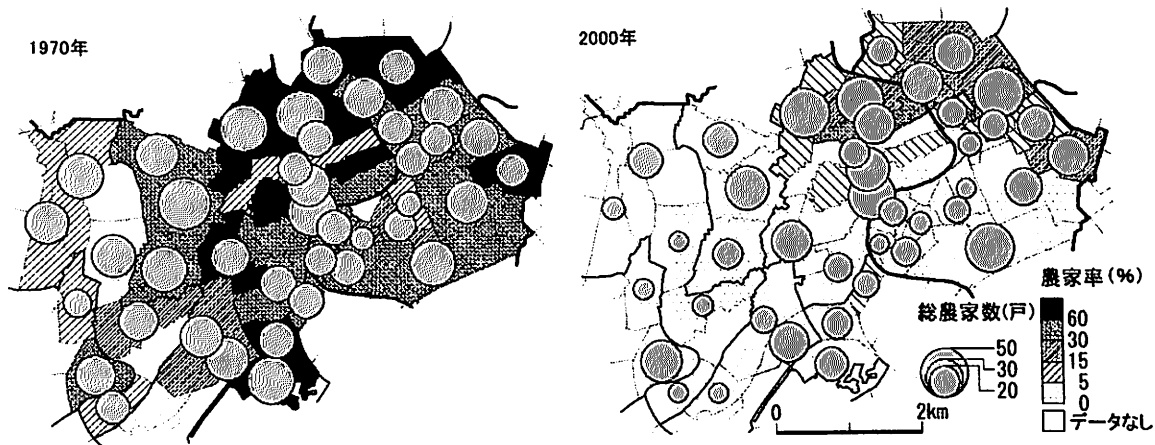


図5 越谷市大房・大林および松伏の水郷周辺集落の総農家数と農家率(左1970年 右2000年) 2000年世界農林業センサス農業集落カードより作成

る。田山花袋が探訪した大正期においても、新方領の耕地整理が行われており、それに伴って千間堀の改修工事が行われた。葛西用水路においても、古利根堰の改築(1935(大正10)年竣工)、瓦曾根堰の改築(1938(大正13)年竣工)が行われた。しかし、景観を最も大きく変えたのは、1960年代後半から進められた葛西用水路の改修事業であろう。越谷・松伏の水郷景観は、単に低湿地というだけでなく、排水機能をもつ河川を堰き止め、水位をあげ、それを用水に利用するというなかで形成された。しかし、こうしたかんがい方式は、下流での用水不足と、上流部で排水不良という構造的な問題を有していたのである。この問題を根本的に解決し、安定した用水の確保と排水の確立が目指されたのである。また、急速な都市化に伴う水質の悪化や地盤沈下への対応も必要とされた。古利根堰は改築(1981年)され、逆川は鋼矢板護岸の水路となり、面積は約半分になった。千間堀は排水機能を高めるため、逆川がサイフォンで通り抜ける構造に改められるとともに、大吉遊水地がつくられたのである。また、瓦曾根溜井は、改修以前は元荒川流路全体を溜井として使っていたが、改修後は中土手で仕切り用排水を分離、瓦曾根堰も改築(1996年)された。こうして、水辺の景観は大きく変化したのである。なお、整備された葛西用水であるが、現在越谷市以南の地域では、都市化が進んだため、農業的基盤はほとんど失われており、用水路としての機能は極めて限定的である。

第2に都市化の進展である。越谷市は、1960年代から大都市東京の郊外住宅地としての開発が進んだ。人口は1960(昭和35)年には49,460人であったが、2000(平成12)年には308,047人となるなど急増した。1970年世界農林業センサスによれば、越谷市の大林・大房地区および田山花袋のいう松伏水郷の周辺集落の農家は約1,300戸、農家率はおおよそ約2割であった。しかし、2000年世界農林業センサスでは農家数は約650戸、農家率は1%台に大幅に減少した(図5)。とりわけ、桃の咲き誇るさまを記述した大房・大林地区や、松伏の水郷の中心に位置する花田地区は、市街化区域に指定されたうえ、土地区画整備事業が実施された結果、住宅街へと完全に変貌し、農地は僅かに残存しているのみで

ある。

松伏町でも同様である。越谷市域よりは多くの農地が残されているが、それでも1986(昭和61)年には住宅都市整備公団によって「ゆめみの地区」の整備分譲が行われるなどの都市的な開発が行われている。

しかしながら、都市化などの要因で変貌しようとも、土地条件などを変えることは難しい。区画整理などを行い、宅地化をしたとしても、水郷と呼ばれた低湿地という土地基盤を変えることはできない。そのため、地域の一角に遊水機能を保持することが不可欠となる。そこは、通常は親水機能を持った公園に利用される(写真3)。小河川の暗渠化は可能であっても、中河川ともなると排水機能を維持する観点からもある程度の川幅を維持する必要がある。そこに水郷の名残を見出すことができる。また、自然堤防上の古くからの集落、屋敷は保持される場合が多く、新興の住宅地であっても容易に他との見分けをつけることができる。



写真3 大吉遊水池(2008年撮影)

## 6. 終わりに

いわゆる散歩を単なる、食べ歩きや名所旧跡めぐりに終わらせないためには、地域の土地基盤と歴史的背景の理解が不可欠であろう。本稿では、田山花袋の著した『東京近郊一日の行楽』の中から、安行および越谷を取り上げ、それを手がかりとして、地域の変容を記述した。

田山花袋が見た郊外の景観は、都市化の進展によって大きく変貌している。それは、ここで検討した埼玉県東南部の安行や越谷だけではない。一般に都市での様々な活動が増大するにつれて、都市域は拡大する。

そして、それとともに郊外も外延的に拡大することになる。結果として農地や林地は住宅地や工業用地に変化していく。とはいえ、幹線交通軸から離れた地域や市街化調整区域など法的に開発が規制された地域では、郊外農村の景観が長く残存することになる。安行は交通線から離れた場所であったことにより、郊外農村の景観が長い間保持されてきた。今日でも郊外農村的景観を観察することができる。一方、越谷は交通線に近接していたこともあって急速に変貌し、郊外農村の景観は全く失われている。この2つの地域を比較することで場所による都市化プロセスの違いをはっきりと認識することができる。

土地条件は、時代が変わったからといって変化してしまうわけではない。地形や土地利用などの詳細な観察により土地条件を再確認することで、土地資源の利用の可能性や制約を知ることができる。越谷では、低湿地という土地条件を前提にした都市計画がなされるべきである。しかし、旧河道や後背湿地などにスプロールの都市化をしてしまった地区が多く見うけられる。一方、台地上に位置する安行では土地基盤を生かして、植木・苗木・花き・花木といった付加価値の高い農業生産を行ってきた。近年埼玉高速鉄道の開通等により急速に宅地開発がすすめられようとしている。明確な土地利用計画と規制の必要性を見出すには十分なフィールドである。

本稿を通じて、身近な地域のあるべき姿を検討する一つの視点が提示できたものとする。

注)1970年世界農林業センサス農業集落カードには収入の第1位部門に苗木・植木、花き・花木の項目はなくその他で一括されているが、他の項目と合わせて判断すれば、ほとんどが苗木・植木もしくは花き・花木であることは明らかである。

追記:本稿は、2009年オープンカレッジ環境共生研究所提供講座「身近な地域を考える」において筆者が担当した講義ならびに本講座講師、環境共生研究所客員研究員大竹伸郎氏とともに案内した野外観察での実践をもとに記述したものである。講座受講生の皆様には毎回

貴重な意見をいただいている。お礼申し上げます。

#### 参考文献

- 川口市(1982)『川口市史近代資料編』川口市  
 川口市(1988a)『川口市史通史編上巻』川口市  
 川口市(1988b)『川口市史通史編下巻』川口市  
 国木田独歩(1901)『武蔵野』民友社  
 越谷市(1977)『越谷市史第2巻』越谷市  
 小林一郎(1991)解説. 田山花袋『東京近郊一日の行楽』  
 社会思想社  
 埼玉県(1953)『武蔵国郡村誌』埼玉県  
 埼玉県立浦和図書館(1994)『埼玉県写真帖(大正10年)』  
 埼玉県  
 品田譲(1974)『都市の自然誌』中央公論社  
 杉浦芳夫(1992)『文学の中の地理空間』古今書院  
 田山花袋(1909)『田舎教師』佐久良書房  
 田山花袋(1912)新しき紀行文. 『花袋文話』博文社  
 田山花袋(1917)『東京の三十年』博文館  
 田山花袋(1923)『京阪一日の行楽』博文館  
 田山花袋(1923)『東京近郊一日の行楽』博文社  
 田山花袋(1991)『東京近郊一日の行楽』社会思想社  
 樋口忠彦(2000)『郊外の風景』教育出版

## Regional Transformation at ANGYO and KOSHIGAYA, Southeastern Saitama Prefecture

— Clues to *Tokyo kinko ichinichi no koraku* (Day out trip the suburbs of Tokyo) by Katai Tayama —

AKIMOTO Hiroaki

In this paper, the author describe the landscape transform at Angyo and Koshigaya , the southeastern Saitama Prefecture to a clue *Tokyo kinko ichinichi no koraku*; day out trip the suburbs of Tokyo, by Tayama katai. This book wrote landscape of Tokyo suburban area in Taisho era. The author compared a current landscape with the description of the landscape in this book.

So the author show one viewpoint of imminent local "sightseeing" and aimed at showing the directionality of the future local structure.